仕返しは仲間の前で

有坂 広一

主宰の山川雄太は最初の頃はニコニコし、好感度はよかった。が、慣れてくるとたちまち本性を現し、権力者然として振る舞うようになった。同人雑誌でも、こんな手合いがいるのかと石上陽一は呆れた。会員の中には不満がくすぶっていて、

「あんな奴は追い出しちまえ」

囁き声さえ聞こえて来る。石上は当分様子を見ることにした。彼は三十七歳になって初めて同人雑誌火炎に参加した。今まで小説らしいものを書いたことがない素人である。見本誌を読むと、初心者の作品が多く、これなら自分でも書けそうな気がした。とはいえ、会に入って八ヶ月が経ち、その間に二号パスしたにもかかわらず、まだものにできないでいる。

「石上さん、一体いつ書くの」

「もし、載ったら遠慮なく酷評するからな」

「小説を発表すると、その人の才能が分るよ」

などと、同人達はてぐすね引いて待っている。何とか早く書いて存在感をアピールしたいところだ。号が出る度にスルーしていると、寛大な彼らもつい見下しがちになる。石上は周りの捉え方に反発を覚え、悔しい思いをしている。主宰の山川も動きの遅い石上に尊大になっているのかも知れない。いつだったか、合評会の帰りに二次会のスナックに立ち寄った。そこは池袋の東口にあり、美人のママがいて、沖縄料理を食べさせる店である。ママは年齢相応に肉がつき、胸はほどよく盛り上がり、同人達のちょっとしたマドンナである。

カウンターで飲んでいると、主宰が石上をこう紹介した。

「こちらは我々の会では、もっとも温厚な同人です」

それだけで白けた。そんなことを言われて嬉しいはずはない。温厚は無能の同義語であり、パッとしない存在を意味しているのだ。

ママは返事に困り、

「はあ…」曖昧な笑みを浮かべた。ママがいなくなってから抗議をした。

「俺はあんたが言うような性格じゃない。自称ウサギの仮面をかぶったライオンだ。温厚は戦略であって、いつ牙をむき出しにするか、分からないからな」
脅かしておいた。山川は胡乱な顔つきで見返した。
「何も書かなくてもライオンかい」
「そうだ、眠れるライオンさ」
「虚勢を張りなさんな」
山川は嘲笑った。石上は特に山川には猛獣ぶりを発揮してやりたかった。御しやすいと思われたくなかった。カラオケをセットしろ、皆の注文をまとめろだのと、会社の上司じゃあるまいし、こんな指示をされる言われはない。そればかりか、英雄色を好むと言わぬばかりに女に貪欲だった。いや飢えていると言っていい。新しく同人を募集して女が入って来ると、雄犬が尻尾を振るように近づいて行き、親愛の情を示す。ある女性同人は、
「嫌ねえ」
顔をしかめるが、そういう本人もお手つきだったりする。
「あんな男に身を許すなんて、最低よ」
非難しながら、自分のことを暴露している女もいる。山川の年齢は石上とほぼ同じで、色の浅黒い二枚目風。ただし、にやけているからか、せっかくの男ぶりも半減だ。そのうちペシャンコにしてやるからなと石上は敵対心を抱くようになった。
入会して何度目かの会報が届いた。十二月十五日に今年最後の会合が開かれる。プリントの余白に山川の手書きの文字があり、何だろうと、石上はその下手な字に目を通したら、
「よい批評をお願いします」
という文言だった。褒めてくれと言っているようなものである。いや、そのものずばりで、図々しい奴だ。山川は彼の《性格》を甘く見たのだろう。石上は合評会で、鋭さや先見性や博学を吐露しがちになるのを意識して避け、あえて穏やかな批評を心掛けている。それはいい気な連中への抵抗なのに山川はそれを誤解しているのだ。
次回は山川の詩三篇が俎上に載る。どう見てもできのいい作品ではないから、本人も自信がないに違いない。だからと言って、わざわざこんなことを書いてくるのは気が知れない。人を支配したがる主宰に屈服するつもりはなく、
（誰が褒めてやるものか）

ますます反抗的な気持ちになった。
半月後、会に出かけた。いつもの年金会館と違って、喫茶店が会合の場所である。ユリノキの聳(そび)える小公園のかたわを通って行く。師走というのに生暖かく、寒くないのが物足りないくらいだ。出席者は少なく六、七人くらいで、時間通りに会は始まり、山川の気合の入らない挨拶から始まった。最初に指名された人が、否定的な発言をした後、次に石上さん、どうですかと指された。
「その前に」と石上はまずこう断った。
「会報によい批評してくれと書かれてあったけど、あれ、どういう意味？」
「別に他意はないです」
「でも、意味深だよ」
「強いて言うなら、合評会を盛り上げてほしいと言いたかっただけだよ」
「褒めてくれと言うことじゃないのかい」
「あはははは…」誰かが笑った。
「そういうことを、いちいち書いてくるのは問題だな」
石上は強い口調だった。
「そう向きにならないでよ。どなたかご意見はないですか」
誰かが発言したが、取るに足りないものだった。
「他には？」
「特にないね」と二、三の同人が言う。
「沈黙は最大の侮辱的な酷評である、と誰か言っているけど、どうやら、そうなったらしいなと山川は苦笑した。
「今回は、小説も詩も全体的に低調だったね」外山というベテランが言う。「もっと本を読んで勉強をした方がいいね」
「マシな本はあるのかね。なかなか見当たらないな」
「若手作家達も一部のニーズにしか応えていないしね」
「彼らの作品を読んだけど、全然面白くないな」
同人達は言う。
「石上さん、何か最近感銘する本を読みましたか」外山が顔を立てるように聞いた。
「この間、友人に勧められてサドの『悪徳の栄え』を読んだけど、案外面白かったね。今は文明も文化も文芸も袋小路に入り込んで、行き詰っている。だから、逆に非文学と見られがちなサドに今日的な意味合いを感じるな。いわば彼は愚行文学の大家として評価できます」石上は力説した。

「ほうほう、愚行文学ねえ。そういう命名の仕方は初耳ですな」と外山。
「しかし何だね。石上さんは、妙な文学にシンパシーを感じるね」と四十年配の同人。
「俺もサドに関心を持っているよ」ほかならぬ山川主宰が賛意を示した。そしてショルダーバッグから文庫本を一冊取り出した。「ほら、これ」と見せた。　それは澁澤龍彦の『サド侯爵の生涯』だった。
「それは後にしてよ。まず俺のから行くから。例を出して言うと」石上がさらに続ける。「六十の老人を甦らせるために何人もの美女がいたれりつくせりの奉仕をするんだけど、これが面白い。爺さんの顔に平手を食らわせ、唾を吐きかけ、鼻先に放屁をし、あげくは口に脱糞をするんだ。これを読んだ時は笑ったね。現代人はこういう笑いに飢えているんじゃないかな」
「そう、その通り」山川が身を乗り出す。
「スカトロジーなんて大嫌い」女性同人が顔をしかめた。
「石上さんねえ、サドには文学的なリアリティーなんてないですよ。今の時代では空虚な表現だよ」
「そういう言い方は当たっていないことはない。だけど全否定は出来ない」石上は反論した。「こんな窒息しそうな状況から、読者は一時でもアナーキーな場所で開放感を味わいたいのです」
「そうだ、現代は異質なものをどかんと導入しないと、ますます衰弱するばかりだ。皆ももっとアブノーマルを吸収した方がいいね」山川は同人たちを見回した。
「石上さんは、ああいうものを書こうとしているわけ」
「書くものは違うさ。ただ愚行という点で、共感するね」
「その愚行を演じる人って、幸せになるんですか」女性が妙なことを聞いた。
「なりません。《愚か者は幸せになれない》ってね」石上は笑った。
「何さ」
「ところで、石上さん、これも読みなよ」
　山川がさっきの文庫本を投げて寄越した。
「今、読みたくないよ」
「いいから、持って行きな」
「いいよ。他の本を読んでいるから」
「これはお勧めだ。俺が言うんだから、間違いない」
　強引なやり方に向かっ腹が立った。が、借りるだけ借りておいて、気が向いたら読めばいいと受け取っておいた。

何日かが過ぎた。
その日は土曜日で出勤の日である。石上の勤め先は丸の内にある大手の法律事務所で、資料室で働いている。午前中までいればいいから普段着で出て来た。やることもないし同僚も二、三人しかいない。プリントアウトした『今夜だけ愛して』という二十枚ほどの短編に赤を入れた。二十代の頃、行きつけのバーに小説家志望のホステスがいて、知り合いになり、一緒に旅をしたり、好きな作家の本を集めたりした。それを題材にした話である。当時の彼女はまだ何も書いていなくて、機が熟したら飲んだくれの行方不明の父のことをモデルにして書きたいと言っていた。石上とて作家を志していたが、習作すら書けず、お手上げだった。何も書けないけれど、いつかは小説家になれると信じていた。虚妄だろうと何だろうと信じないことには生きていけなかった。
「私、ベストセラーを当てて、うんとお金を稼ぎたいわ」
「ぼくは金じゃない。社会的な存在の確保だ」
「お互いに、夢を実現したいわね」
「ああ、もちろんだよ」
だが生活に翻弄されてキーを打つ余裕などなく、十二年がいたずらに過ぎた。最近やっと同人雑誌に所属し、緒についたばかりだ。
締め切りは半月後に迫っているから、何とか間に合わせたかった。目下追い込みをかけていて、推敲に推敲を重ねている。気合を入れていると、山川が電話をかけて寄越した。
「先日、あんたに貸したサドの本、必要になってね、今日中に返してほしいんだ」
借りて三日しか経っていない。なんて勝手な奴だ…
「急に何だよ」
「他の雑誌にサド論を書くことになってね。参考にするからさ。俺、大阪に出張中なんで、悪いけど、自宅のメールボックスに放り込んでおいてくれないか」
「俺が貸してくれと言ったわけじゃない。自分で取りに来なよ」
「そこを頼むよ。俺、焦っているんだ」
「そんなこと知っちゃいない」
「明朝、帰京して、参考にするんだけど、頼むよ」
「いくらなんでも馬鹿にしていないか」
「埋め合わせはするよ」
石上は腹を立てて電話を切った。会社は午前中に終わり、家に帰るばかりだから、特に用はない。本はバ

ッグの中に入れてあり、電車の中で大半を読んだ。ただ山川の言う通りにしたくないだけだ。結局、午後から行くことにした。腹立たしいけれど仕方がない。住まいは椎名町にあり、いつか例会の帰りに皆で立ち寄ったことがある。十一階建てのマンションで、四階に自宅がある。オートロックの操作をして用件を伝えた。
「はい。そのことは聞いております」顔を知っている細君の声がした。
「郵便受けに入れておきます」
「どうぞ、上がって来てください」
山川もお茶を飲んで行ってくれと言っていた。ダイニングキッチンに通され、テーブルに座った。三十代後半の山川夫人は、いくらか所帯じみているが、それが馴染みやすくて魅力的だと前に思ったことがある。
「本当に申し訳ありません」
奥さんは恐縮しながら紅茶を入れてくれた。お茶を飲んで形式的な会話を交わしているうちに気分がほぐれて来た。
「山川さんはなかなかの読書家ですねえ。映画もよく観ているようだし」
半分開け放った襖越しに六畳の書斎が見えた。
「古いＤＶＤを見るのが好きなんですよ」
「彼はどんな映画がお気に入りなのかな」と石上は独り言。
「ご覧になって下さい」
「いいですか。じゃあ見せて頂きます」
立ち上がって隣室に移動した。本棚を見てから、一角を占めている映画のタイトルに目を通した。その間に奥さんは簡単に化粧をし直して来た。
「洋画がほとんどだなあ」
「ええ。書く上で参考になるそうです」
「この『ロンゲストヤード』は面白い映画です」石上は何気なく言った。
「私も以前に主人と一緒に観ました」
話していると、細君の息が顔にかかり、わずかにアルコールの匂いがした。石上が来る前にコップ酒でも飲んでいたのかもしれない。彼はふと山川夫妻がセックスレス状態になっているという話を思い出した。
「ぼくはこの映画のあるシーンが好きです」
「どんなところかしら」
――刑務所に入りたての主人公が、署長室前のデスクに一人で座っている女秘書に、
「君は立ってセックスをしたことがあるか」
と聞く。それだけならどうということはない。男が

通り過ぎてから秘書が思わずニヤッと笑うシーンがあって、エロチックだった。ここは前触れで、後でセリフの通りのことが行われる。むろん、そんなことをいちいち話すわけにはいかない。
「もっとも、その場面は男が喜ぶだけですがね」
「そうなの」
「いい場面だけど…」
「覚えていないわ」
「微妙なんです」
「見落としたのか知らん」
　またアルコールの匂いがした。山川夫人の方がはるかに卑猥な感じがした。その時、電話がかかって来た。友達のようである。
「近くに来ているのなら。いらっしゃいよ」
「……」
「いいわよ。夫はいないし」
　長居するわけにはいかなくなり、目礼して帰ることにした。マンションを出て、外を歩きながらあんな色っぽい女を放っておくなんて悪い奴だと山川を非難したくなった。
　一月の締め切りにはどうにか間に合い、メールで送信することが出来た。言わば処女小説で、自信があるともないとも言えない。同人たちはどう評価するか知らないが、采は投げられた。どうにでもなれと開き直った。三月には火炎十四号誌上に掲載され、いくつもの反響があった。
「面白かったですよ」
「甘いけどな」
「最初はこれでいいよ」
　同人達が好意的な感想を述べてくれた。格別の仕上がりではないけれど、初めてにしては何とか格好がついていると言い、大方の同人も同じような見方をしている。無論お世辞も多いだろう。読み返すと物足りないが、これでよしとするしかない。
　発表して一ヶ月した頃、女名の手紙が届いた。封筒の送り主の名前を見た時はびっくりした。平島美佐子を知らないはずはない。二十代に付き合っていた美佐子に間違いない。
――インターネットで検索したら、火炎が目に止り、最新号を送っていただきました。さっそく私も仲間に入れてもらいました。名簿で貴方の住所を知り、奇遇に驚きながらお手紙をしたためました。同誌に陽一さんも書いていて、何をおいても目を通し、私のことを

モデルにしていることを知りました。主人公のソヨ子は私のことだというのは一目瞭然です。あんな風に滑稽化して書くなんてなかなかの才能ね。しかし私を惨めこの上もない女に仕立て上げられるなんて、思ってもみませんでした。

私事ですが、子供も大きくなり、余裕が出てきました。これからは創作に挑戦するつもりです。もちろん陽一さんには遠慮なく反撃しますから楽しみにしていてください。

ただし、例会で顔を合わせたら、私達が旧知の間柄ということは伏せておいて下さい。何かとやりにくくなりますからーー

手紙を読みながら、火炎の会で美佐子がどんな振る舞い方をするか、気になった。男女間のトラブルを起さなければいい。夫がいるとはいえ、多情な女だから何をしでかすか分かったものではない。それにしても具合の悪い女が入会したものだ。何よりも彼女を悪く書いた作品に気分を害したに違いない。かなり事実に忠実に書いた。主人公のカメラマン志望はその頃親しかった友人をモデルにした。

改めて自作の小説を省略しながら読み返した。

今夜だけ愛して

石上陽一

夜遅くチャイムが鳴った。時計を見ると、十一時近い時刻である。今頃、誰だろう、ドアを開けると、ソヨ子がバツの悪そうな顔をして立っていた。こういう場面を予測できないわけではなく、さほど驚かなかった。店の帰りだろう。幸治はいくらか躊躇したが、

「入りなよ」

中に入れてやった。ソヨ子は座布団に座ると、部屋の中を懐かしげに見まわした。ワンルームに本棚や机や、カメラの機材などがあり、以前とほとんど変わっていない。壁に貼り付けてある写真は見たことがないだろう。

「どうしたんだい。突然」

パジャマ姿の幸治は胡坐(あぐら)をかいて座った。

「後藤さんと別れたの」

「そんなことだろうと思った」

「私、ここに姿を見せる権利はないけど、ごめんね」

「後藤さんの元に走ったからな」

「貴方がくれた何通ものメールや手紙を読み返してい

るうちに、会いたくなったの。その中の一通をハンドバッグに持っているわ」
「それは恥ずかしいな」
ソヨ子は取り出して見せてくれた。
「どれ、どれ」

――ソヨ子さんほど官能的な女性はいません。小悪魔的な貴女の眼差しに見つめられると射すくめられてしまいそうになります。先日、お母さんに合わせて頂いて、大変喜んでいます。謙虚で慈悲深い人柄は、心に響くものがあります。ソヨ子さんは、そのお母さんに大事に育てられたのですね。いくらか甘えん坊のようですが、それがソヨ子さんの魅力です。その一方とてもしっかりしたところがあって、特に金銭感覚は鋭くて、感心しました。ぼくには、これといった取り柄はありませんが、写真には自信があります。近い将来は報道写真の分野で大きく羽ばたくつもりです。貴女のポートレートも撮らせて下さい。気位が高く、感受性の豊かなソヨ子さんは素晴らしい素材です。このところ、白昼夢にソヨ子さんが毎日出て来て、ぼくを悩ませます。どうしようもなく好きです。恋焦がれています。どうか、ぼくの気持ちをお汲み取りください。

――女神に魂を奪われた男より――

「俺はよっぽど、君に惚れていたんだな」
「私、嬉しいわ。でも、あんな別れ方をして怒っているんじゃないの」
「そんなことは忘れな。今夜はゆっくりしていけばいい。遅い時間だから、泊まっていけば」
「ああ、よかった。感謝するわ。私は今でも、貴方が好きよ」
ソヨ子は目に涙をにじませた。寝ながら話そうと布団を二組敷いた。寝る前に彼女の持参したショートケーキを食べた。
「あの写真はカメラ雑誌に入選したんだよ」
幸治は壁の一角を指さした。内緒だが今付き合っている片山みどりだ。副都心のビルの側面に女を写した大きなパネルが掲げられ、その下にみどりが似たような服装と帽子で立っている写真だ。パネルの女がじろりとみどりを見下ろしているという構図である。みどりは夏休みで帰省しており、東京駅に見送った際、「浮気はご法度よ」と諌めた。むろん、そんなつもりはない。
「個性的な綺麗なモデルさんね」

「ああ、知り合いでね」
「そうだ、私のも撮ってくれるはずだったわね」
「ソヨ子の心変わりがいけないよ」
それから二人は歯を磨いて布団に横たわった。
「お母さんは元気なの」
「どうにかね」
「お姉さんは」
「元気だけど、男っ気が全然ないの。だからヘンな冗談を言うの。家に男の客が来たら、お風呂に入れてあげて、裸を見てやろうかだって」
「出会いのチャンスがないのかな」
「そうなの。あの年になっても、男と喫茶店に入ったことがないのよ」
「それは寂しいね」
眠気を覚え、サークラインを消した。今頃、みどりはどうしているのだろう。小柄なソヨ子と違って、上背があり、ボリュームがある。早く帰ってこないか、帰京したら、存分に抱いてやろう。
「ねえ、眠れるまで私の手を握っていて」
「そんなことをしたら、俺が眠れなくなるよ」
「今夜はずいぶん紳士的なのね。前は野性動物のように襲って来たくせに。いつから清教徒になったの」
「眠いから、その気にならないんだ」
「女に恥をかかせるわけ」
「けじめと抑制が大事だ。今夜は我慢しな」
「我慢しなだって。失礼な」
ソヨ子は暗闇の中で溜息や吐息をついたりして、落ち着かなかった。暑苦しいのか、毛布から脚を顕わにはみ出させている。俺を捨てた罰だ…そして田舎にいるみどりの顔を浮かべて呟いた（ぼくは君を裏切らないから安心して。でも、体に火のついた女と布団を並べて寝ているのは楽しいよ）
ソヨ子はいつの間にか眠ってしまった。

ソヨ子と付き合っていた頃、幸治は写真専門学校に通っていて、夜はバベルというバーの従業員だった。経済観念に乏しく、いつだって金を持っていなかった。それはかなりの欠点であるにもかかわらず、本人はそんなことに無頓着だった。そのくせ女好きで同じ店のソヨ子に白羽の矢を立てていた。うまい具合にデートに誘い、新宿御苑に行った。芝生に座り、
「ソヨ子さんは本を読むのが好きだってね。道理で頭がいいや」
そう言いながら肩に手を置いた。

「馴れ馴れしいけど、どういうつもりなの」
「君と馬が合うような気がするからさ」
「私はあんたの恋人じゃないわ」
「そのうち、そうなるさ」
その夜、仕事の帰りにソヨ子が新宿のクラブに案内してくれた。そこには高校時代の友達がいて、オーナーが血縁者だとかである。幸治達は祝杯をあげ、双方の好意を確認し合った。その時から《恋人同士》の交際が始まり、思いっきり性に溺れた。乳房に顔を埋め、ぼってりした大腿を撫で、喘ぎ声を聞いて現実を忘れようとした。毎晩のように会い、飽きることがなかった。しかしソヨ子は水商売にうんざりしているらしかった。この世界に入って三年が過ぎているが、常日頃から現状を抜け出したいと思っている。そのせいかしばしば有刺鉄線を飛び越える夢を見る。
「今のところをやめて、何かしたいの」
「どんなことを」
「具体的には考えていないわ」
「それじゃ仕様がないよ」
「何をすればいいのか、ヒントを教えて」
「そんなこと、分る訳ないよ」
「あんたって、頼りないわね」
「いきなり、なんだよ」
「話し相手にもならないもの」
「人のせいにしないでくれよ」
そんな時、店に白馬の王子様が現れた。ソヨ子は一目惚れをした。終始つき切りでもてなし、体中からフェロモンを発散させた。相手は三十二歳の後藤という会社員である。
「お母さんはお勤めをしていると聞いたけど、もう長いの」
「ええ、そうなの。母の仕事は…」
ソヨ子は遠慮気味に答えた。母の仕事を誇りに思っていて、自慢したいくらいだった。が、後藤には気おくれがしたのか、遠回しに話す。幸治も同じことを聞かされた。彼女の母は小学校の用務主事をしている。料理屋の下働きをしていた母にとって、学校という安定した職場を得たのは大出世を意味した。物心つく頃から父親がいなかった。トビ職の父は社会的な適応能力がなくて、酒ばかり飲んでいた。あげくは妻子を捨てて行方知らずのままである。十八の時、母から聞かされた。二人姉妹の母子家庭で、相当惨めだったが、それでも姉より何倍も母から愛されたことが心に残っている。つまり溺愛されて、甘ったれた性格になった

と言うことだ。
「母を貴方に是非会わせたいの。会って下さる」
「そりゃ喜んで会いますよ」
「楽しみだわ」
ソヨ子にとって、相手は仕事や収入面で安定していることが絶対的な条件だった。その点、一部上場に勤めている後藤は理想的と言っていい。こうなると幸治はいないも同然だった。いや、そばにいようがいまいがお構いなしに戯れた。もともと彼女はむき出しに突進する方だった。もし強引に止めさせようものなら、カッとなって怒り狂いかねない。幸治は嫉妬よりも蔑（ないがしろ）にされたことが悔しかった。
喫茶店に誘われて改めて胸の内を聞かされた。
「貴方のことは今でも好きよ。でも将来も決まっていないし、年も若いし、このまま付き合っても仕方ないでしょう。ねえ私の気持ち分かって。ホステスが水商売から抜け出すには、ちゃんとした男を見つけて、結婚するしかないのよ。私達は上っ調子な気持ちじゃないわ。真剣よ。こんなことは滅多にないもの」
ソヨ子は真剣な面持ちだった。
「きみは一人で思い込んでいるだけだ」
「何を根拠にして、そんなことを言うの」
「あの男は結婚のことなんか、これっぽっちも考えていないね。顔見れば分る。体のいい遊び人だ」
「勝手なことを言わないで。彼は今時珍しいくらい誠実な人だから」
「あれで誠実って言うのか。一時的に幻惑されているだけで、いずれ捨てられるさ」
「何よ。失礼ね。捨てられたのは誰よ」
ソヨ子は後藤のことしか頭にないのか、何を言われても聞く耳を持たなかった。幸治は完全燃焼しないうちに別れるのは不本意だった。毎日ぼんやり過ごし、腐っている時に友達にコンパに誘われて、そこで片山みどりと知り合った。神経症的なもやもやは一辺に吹き飛んだ。彼女は二歳年下で、会社に勤めている。恵まれた家庭に育ち、母親を尊敬しているのはソヨ子と似ている。幸治が将来カメラマンになると聞くと関心を示し、才能が開花するのが楽しみだと期待をかけてくれた。

何事もなく一夜が明けた。時計を見ると、十時を過ぎている。長々と眠ったものである。ソヨ子は寝息を立てて惰眠をむさぼっている。起き上がって窓を開けると、空は一雨来そうな気配だ。階下に降りて共用の

郵便受けから新聞と封書を取り出した。手紙はみどりからで、その場で開封し、部屋に戻りながら斜め読みした。

――親愛なる幸治様

貴方がお付き合いなさった女性のこと、とても興味深く読ませていただきました。お手紙によると、その方は《情緒不安定で、いつも飢えていて、いい男に出会うと、途端に理性を失って、衝動的に突っ走ってしまう》とかで、こういうことって怖いなあと思いました。《とにかく実体よりも虚飾の部分の方が多いのが鼻につく》というのは私も女の端くれとして、思わず我が身を振り返ってしまいました。《お金を持っていないような男なんて、男として認めない》というのはある意味真実かも知れないけれど、私は必ずしもそうは考えません。世の中全体が経済ばかりに傾き過ぎるから、せめてそのような流れに抗いたいと思います。でも、《母親に愛されて、自分を箱入り娘だの、お嬢様育ちだのと得意になっている》としてもそれはそれでいいじゃないですか。決して軽薄などと決めつけることはないと思います。親に愛されたと言う記憶は大事です。それに人の目をじっと見つめる官能的な眼差しは、後になって《近眼の小さな目でしかない》というのは感心しません。女性の容姿をとやかく言うのは慎んだ方がいいです。どういう女性であれ、会社員の男性と結婚なさって、幸福になられることを願っています。今度こそ行き詰った現状を打開されるのではないでしょうか。失敗するようなことはないと思いますーー

その他いくつかのことが書かれてあった。好きだの、恋しいだの、帰京したら抱いてだの、気恥しいような言葉が並んでいる。読み終わると、二階の自室に戻り、ソヨ子に背を向けて、机の引き出しにそっと仕舞い込んだ。

「ねえ、タバコないの」ソヨ子が背後で聞いた。

「あれ、起きていたの」幸治が振り返る。

「さっきからね」

「禁煙したんじゃないの」

「こういう状況で吸わずにいられないわ。なければ買って来て」

「俺、ソヨ子の小間使いじゃないよ」

「女が外に出る時は、化粧しなきゃいけないのよ。いいじゃない、頼まれてよ。私、イライラしているの」

「仕様がないなあ」

みどりから手紙が来たことだし、気分は最高にいい。ソヨ子もタバコを吸えば落ち着いてくれるだろう。十分後には戻ってきて、マルボロを投げてやった。ソヨ子はさっそく一本抜き取って火をつけた。たちまち煙が部屋中に充満し、煙に敏感になっている幸治は迷惑だった。彼は禁煙して二年が過ぎている。ソヨ子は小馬鹿にしたように、

「あんた、凄く楽しそうじゃない」幸治の顔に煙を吹きかけた。

「よせよ」

「ニタニタして、何だっていうの」

「俺、そんなにニタついているかい」

「しまらないったらないよ」

「自分で意識して、顔を引き締めているつもりだけど」

「恋人が出来たみたいね」

「さあ、どうかな」

「悪いけど、私、手紙を読んじゃった」

「えッ、何だって。ひどいじゃないか」

「こそこそ隠したりして何さ」

「こそこそも何も。そんなのルール違反だろう」

「それくらい、いいじゃないの」

「卑怯じゃないか」

「私のことボロクソに書いたわね」

やり合っているうちに盗み読みをしたことよりも、書いてある中身の方が悪事ということになった。

「私はあんたの手紙に魅かれて、ここに来たのよ。それなのに、この手紙は何なの。裏切り行為も同然じゃないか」

変な理屈を並べながら、ソヨ子は化粧を始めた。ファンデーションを塗ると、つるりとした顔になり、性悪女に見えた。

「こんなコがいるのだったら、昨夜は何故追い返さなかったのよ。私はあんたが言うように性に飢えた女じゃないわ。会社員と結婚して幸せになれだと。大きなお世話よ」

ソヨ子はことさら笑顔を浮かべた。そうしなければ悲しくなってしまうからだ。が、笑顔を浮かべても表情が歪みそうになることがあった。

「それに何さ。何度も同じ失敗を繰り返しているとか書いてあるけど、これでも一生懸命なのよ。私の焦燥感が分からないの」

彼女の怒りは収まりそうにない。時々窓の外に目をやり、今にも雨の落ちて来そうな空模様を気にしている。やがて化粧をすませ、バッグを手にして立ち上が

った。
「ここに二度と来る必要がないと分かっただけでも、来た甲斐があったわ」
「俺もまたおいで、と言えないのが残念だ」
「いいの、いいの、こんなところ何の未練もないから」
「もっとゆっくりしていけばいいのに」
「うるさい、今さら何を言うんだい」
ソヨ子は睨みつけて部屋を出て行く。降り出した雨は次第に強まって、この調子だと大雨になりそうだった。いささか気の毒だが、どうにもならない。
（今夜だけ愛して・終わり）

あれから十二年の年月が経ち、石上は職業を転々とし、結婚して二児をもうけた。合評会で最初に顔を合わせた時、
「老けたね」美佐子は顔を見上げた。
「そういう君は太ったよ」
「年相応にね」
「俺より一つ上だから、三十八か」
「年のことは言いっこなし」
「でも前よりもチャーミングになったね」
太っていると言っても醜くはなく、むしろ成熟した大人を感じさせた。石上は彼女のモチモチした裸を想像し、性的な興奮を覚えた。
「俺達、再燃させてもいいよ」
「それはダメ。夫がいるし、それに書くことに専念するつもりだから」
「旦那がいてもうまくやれば、見つかりはしないよ」
「他の女と付き合えば」
「君はほかの男と付き合うだろう」
「変なこと言わないでよ」
話しながら山川雄太を意識した。美佐子はとっくに彼の射程に入っていることだろう。あの飢えた狼が何も感じないわけはない。そう思うと今にも発展しそうな気がして、嫉妬心が湧いてきた。とっくに切れた間柄にもかかわらず、石上は放っておけなくなった。
「忠告しておくけど、主宰は好色漢だから、要注意だぞ」
「山川さんって、そんな人なの。でも、なかなかハンサムね」
「女なら誰とでもだ」
「そんな男にひっかかるわけないわ」
「旦那さんは、何をしている人なの」
「普通のサラリーマン」

彼女の夫は体育大学を出ていて、柔道家だとかで、名のある会社に勤め、収入もミドルクラスらしい。美佐子が着ているのも決まっていて、高価なデザイナーブランドということが分る。が夫に満足しているようには見えない。
「ところで、俺のことも書くだろう」
「さあね。ふふふ」
「勘弁してよ」
「勝手なことを言わないで」
美佐子は不敵な笑みを浮かべた。

合評会はほぼ毎月開かれ、同人の作品だけでなく、テーマを決めて論じることがあった。その日の二次会は沖縄料理のスナックに入り、テーブル席に座った。
「平島さんとは、あまり喋っていないから、今夜はお考えをお聞きしたいね」
山川が自分の隣の席に座るように指示した。
「ご迷惑でなければ」
「どうぞ、どうぞ」
二人は泡盛サワーで乾杯して、見初めあった男女のように笑みをかわした。近くの斜め向かいの席で一人の同人と話していた石上は、美佐子が臆せず振る舞い、わざと見せつけているように思えた。石上の相手は一方的に自分の論を展開し、こちらの口を開かせなかった。よく喋る男で、同人雑誌にはこういう手合いは珍しくない。上の空で聞いているだけだから、美佐子達のやり取りが耳に入って来る。
「山川さんって、素敵な詩を書かれるんですね」
「それはどうも有難うございます」
「囲いの中から抜け出すと言うのが、モチーフかしら」
「そうなんです。こだわっています。拙いけどね」
「私にもそれに似た一時期があったから、よく分かります」
「あ、そうだ。是非貴女に読んで欲しい本があるんだ」
山川は中原中也特集の雑誌を差し出した。
「これ、ぼくが崇拝している詩人です。ざっと目を通して下さい。凄くいいから」
女人に本を貸すという手口は古典的で、下心が見えすいている。石上は鼻白んだ。もっとも、女だけではなく誰彼となく本を貸すのが好きらしい。
「気が進まないなら、無理しなくてもいいよ。ただこういう世界もあるってことです」
「読ませていただくわ」
「ぼくも中也に学んで、もっといい詩を書きたいな」

「山川さんの詩は、強く訴えて来るものがあるわ」
あんな詩のどこがいいのか。癖のある書き方だから、読むだけで難渋する。難解というのではなく、気取りであり、文学的な粉飾に過ぎない。
「私、山川さんに内面から湧き出るような才能を感じるわ」
「いやいや、最近は枯渇気味だから」
隣の同人の饒舌に辟易しながら、何気なく美佐子の方に視線をやったら、
「そんなことないわよ。ねえ石上さん」
美佐子に同意を求められた。
「なかなか、いいんじゃないかな」
彼は苦笑に紛らわした。本当はこんな奴に天性の才能なんかあるものかと言いたいところだった。会に入って早々と山川が嫌いになったが、この頃では話し方も作品も何もかも鼻についてきた。こんな輩が美佐子と裸でのたうち回るかと思うと、耐え難い気持ちになった。
(奴らすぐに親密になるだろうな)
そう考えると、ジッとしていられなかった。
「こちらの石上さんは、ついこの間、初めて小説を発表して、好評でしたよ」
「そうなの」
「振った男のアパートにまで訪ねてセックスをしたがる女の話だけど、面白いね」
「私、そんなの関心ないわ」美佐子はムッとした。「志が低くない？　もっと大道を行くべきよ」
「小説は読んで字のごとく小さな説だから、あれでいいんだ」
石上は反論した。美佐子はどうでもいいという顔で、後は山川にボッとなっているだけだった。
「でも、今の小説は停滞しているわねえ」
「時代の流れです」
「滅びるかしらん」
「それはないね。寸前まで来ているけど、文学は残ります」
「そうあってほしいわ」
「色々と試みるといいね」
「やってみるわ」
二人は文学の話で盛り上がっている。あの頃は何かにつけて青臭く、板についていなかった。それが、今では果汁がしたたるような、一段といい女に見えて来た。石上の中に理不尽な思いが湧きおこり、やめろと声を発したくなった。妻のいる男と夫のいる女ではな

いか…
けれども石上や他の同人たちの知らないところで、彼らの関係は進展しているようだった。
七月に入って、子供たちの夏休みが始まった頃、山川夫人から自宅に電話がかかって来た。丁度マンションの夏まつりの最中で、妻も子供も出払っていた。スピーカーから東京音頭や押せ押せ音頭がひときわ大きな音で立て続けに聞こえて来た。
「石上さんは、平島という女と、夫の関係をご存じ？」
「知っています」
「夫の様子がおかしいから、スマホをこっそり見たの。彼女、凄い情熱的なの。セックスのことがめんめんと綴られていて、読むに忍びないわ」
「へえ、そんなに」
石上はよく知っているとはいえ、平常心でいられなかった。美佐子を咎めたいくらいだった。
「あんな夫ですけど、自分の元に取り戻したいのです」
「奥さん、いっそのこと恋人でも作ればいいのに」
「それが駄目なの。夫がいる限り、そんなことできません」
「そんなの、下らないですよ」
「下らなくても、仕方ないわ」
「それじゃ、一生悩まされるだけです」
「一時的なものだと思うわ」
山川は所帯じみた花のない妻に愛情を失っているのかもしれない。三十分ほどあれこれと話した。何の解決策もないが、奥さんは話して少しは気がすんだようだ。外では盆踊りが一旦終わって、花火が始まることを告げている。人々が別の広場に移動すると、やがて打ち上げ花火の音がした。その次にバリバリという仕掛け花火で群衆がどよめき、歓声を上げた。石上は賑やかな音を聞きながら、二作目のアイデアを練っていた。次は六十枚くらいの短編の予定で、十九歳の青年が教会のシスターに恋をして二人して堕落していく話である。
暑い夏も終わりを遂げつつあった。山川と美佐子の関係は相変わらず続いており、石上には目障りでならない。が、どうにもならなかった。
二カ月後の例会で、年金会館の玄関フロアで、美佐子と行き会った。彼女は落ち着かない様子をしていた。
「山川さんって、遅いわね。どうしたの」
「遅れて来るそうだ」
「困ったわ。私、母が具合悪くて、帰らなきゃいけないの。この本、借りっぱなしなの。山川さんに渡して

くれる」
　それは例の中原中也読本だった。石上は不機嫌そうに受け取った。美佐子は急ぎ足で会館を出て行った。三階の会場に行く前に石上はトイレに向かった。中で雑誌をめくると、封筒が一通はさんであった。彼は便座に座り、開封した。
　――愛しています。貴方に抱かれていると、家庭の寂しさを忘れることができます。でも、とても心配なことがあります。夫に発覚し、大トラブルが起きました。夫は貴方をいためつけてやると息巻いています。ただの脅しだと思いますが、一言伝えておきます――
　石上は見終わると、細かく破って便器に流した。それから三階に行くと、十畳ほどの畳の間に十二人の同人が雑談していた。時間が来ても主宰が姿を見せないから、「どうしたんだろう」と言いながら、つい山川批判になった。
「モラルは守るべしなどと、辛気臭いことは言いたくないけど、目に余るものがあるからさ」
「主宰は身勝手で自己中だ」
「私達女から見たら、彼の存在そのものがセクハラですよ」
「代表は代わるべきだな」
　皆が意見を述べ合っていると、四十年配の見知らぬ男が入って来た。がっちりしていて、どことなく矢沢栄吉に似ている。酒を飲んでいるのか、顔が赤黒い。
「どちら様ですか」外山が尋ねた。
「平島と言う者です。山川さんはいますか」男はやや怪しげな呂律で言う。
「もうすぐに来ると思います」
　そこへひょっこりと山川が現れた。
「山川さん、ご面会だよ」外山が言った。
「山川さんはあんたかい。俺は平島だ。ご存じだよね」
「知っていますけど、何か」
「何かじゃねえ。このヤロー」
　男の面相が急に凶暴な表情になった。山川はギョッとした顔をして男を見返した。平島は美佐子の夫である。
「よくも人の女房をたぶらかしたな」
「な、何を言うんです」
「白を切るのか」
　同人達は、とびっきりスリリングなシーンに遭遇したように好奇心に満ちた視線をそそいだ。美佐子の夫は相当酔っていて、足元がふらついている。ふらつき

ながら内側から滲み出るような闘争本能を感じさせた。
「あんた、俺の怒りが分かるか」
平島はさっと山川の袖と襟をつかんだ。
「冷静になりなさい。話せば分ることだから」
「お前のしていることは、話して分ることか」
山川はたちまち畳の上に押し倒された。あんなに酔っているのに、さすがだと石上は体育大学出の柔道の有段者に感銘を覚えた。
「どうだ、参ったか」
「皆にも迷惑をかけるから」
山川はたじろいだ。
「あんたは誰に迷惑をかけているのだ」
「だから、話し合いましょう」
「こいつめ、こうしてやる」
平島は片手で山川の両腕を制し、もう一方の手でズボンを脱がしにかかった。次にパンツを引き千切るように剥いだ。物凄い早業だった。そして股間を潰すような真似をした。
「ギャア！」山川が悲鳴を上げた。女達は急いで視線はずした。
石上は乱暴者に共感しながら、見るに見かねて止めに入った。他の男達もすでに立ちあがって、二人を囲み、ズボンをはかせたりした。
「平島さん、ここにいる連中は大方貴方の味方です。冷静になって下さい」石上はさとした。
「はあ、有難うございます」平島は礼を言う。
そして最後に、
「これで妻とは離婚だ」一言言って立ち去った。
主宰の権威も完全に失墜し、彼は屈辱感に打ちのめされて呆然としている。例会は解散になり、女達は早々と帰って行く。その十日後、会議があり、外山が火炎の主宰を引き継ぐことになった。

初校　みなせ４６号　２０１０年５月１日